

メッセージアウトライン

コロサイ人への手紙 4:7～11 「同労者たち」

[7-8]「私の様子については、主にあって愛する兄弟、忠実な奉仕者、同労のしもべであるテキコが、あなたがたに一部始終を知らせるでしょう。私がテキコをあなたがたのもとに送るのは、あなたがたが私たちの様子を知り、彼によって心に励ましを受けるためにほかなりません」

今パウロは裁判を受けるためにローマにいる。そして彼のそばには何人かの福音のための同労者がいたことが教えられる。使徒 28:16,30~31 を見ると彼は裁判を受けるために、番兵付きで自分だけの家に住むことが許されており、その家は彼が自費で借りた家であり、たずねて来る人たちをみな迎え、少しも妨げられることなく福音を宣べ伝えることができた。しかし、それでも、囚人となっているパウロの友人であると宣言したり、訪問したり、パウロと同じ立場に立っていることを示したりするには勇気が必要であっただろう。それは危険を伴うことである。

まずテキコという人物がいる。彼は使徒 20:4 によれば小アジアの出身で、かつて異邦人教会の代表の一人としてエルサレム教会の貧しいクリスチャンたちに献金を届けに行ったことがあった。彼はエペソ人への手紙を運ぶ任務もゆだねられた。→エペソ 6:21~22 彼は主にあって愛する兄弟であり、忠実な奉仕者、同労のしもべと言われている。彼はパウロからこのように厚い信頼を受け、コロサイ教会へこの手紙を持参することをゆだねられた。パウロは自分のことについては、このテキコが「あなたがたに一部始終を知らせるでしょう」と言う。これはこの短い手紙に中で書き尽くせなかった多くのことや、個人的な消息を伝える使命を彼が負っていることを示している。そのことによってコロサイ教会の人々がパウロの様子を知り、心に励ましを受けるためである。

[9]「また彼は、あなたがたの仲間のひとり、忠実な愛する兄弟オネシモといっしょに行きます。このふたりが、こちらの様子をみな知らせてくれるでしょう」

オネシモは「ピレモンへの手紙」によるとコロサイ教会の信徒のひとりピレモンの奴隷であったが、彼のもとから逃亡した人物である。彼は大都会のローマまで逃げ、そこで不思議なことにパウロと接触することとなり、そこでクリスチャンとなった。彼はパウロのもとで熱心な信仰生活を送っていたが、テキコがパウロの使いとして行く機会に、主人ピレモンのもとへ送り返されることとなった。当時、逃亡奴隷は死刑が常であったが、ピレモンへの手紙ではパウロはオネシモのことをとりなしている。またこの9節ではオネシモのことをいっさい奴隷とか脱走者という呼び方で呼ばず、むしろ、「あなたがたの仲間のひとり」「忠実な愛する兄弟」と推薦している。ここにパウロの愛と配慮を見る。

[10]「私といっしょに囚人となっているアリスタルコが、あなたがたによろしくと言っています。バルナバのいとこであるマルコも同じです。——この人については、もし彼があな

たがたのところに行ったなら、歓迎するようにという指示をあなたがたは受けています。
——」

アリストルコは使徒 20:4 によればテサロニケ出身のマケドニヤ人であった。彼はエペソで暴徒たちに捕らえられた。→使徒 19:29 またパウロが囚人としてローマに出航する時、同行した。→使徒 27:2 この時、彼がパウロと行動をともにするためにはパウロの奴隷として登録する以外に方法はなかったと思われる。それで彼はパウロにつながる同じ囚人としてローマにいるのである。これらのことからアリストルコは、いつも事態が最悪だと思われる場所でも逃げずに堅く立つ人物であったと思われる。

バルナバのいとこであるマルコはパウロとバルナバの第1回伝道旅行の時、助手として同行したが、状況が困難になると一行から離れてエルサレムへ帰ってしまった。→使徒 13:13 それゆえ第2回伝道旅行の時にはパウロは彼を採用しなかった。それからどのような経過をたどったかわからないが、今彼はパウロと共にいる。パウロは彼のことをピレモン 24 では「私の同労者」と言い、彼の最後の手紙となったⅡテモテ 4:11 では「私の務めのために役に立つと」言っている。それゆえマルコはこの時にはパウロの信頼を回復していたと思われる。それでパウロはコロサイ教会の人々にマルコを信頼に足る同労者のひとりであり、「もし彼があなたがたのところに行ったなら、歓迎するように…」と推薦しているのである。

[11]「ユストと呼ばれるイエスもよろしくと言っています。割礼を受けた人では、この人たちだけが、神の国のために働く私の同労者です。また、彼らは私を激励する者となりました」

ユストは彼がユダヤ人キリスト者であったことと、現在パウロとともにいるということ以外何もわかっていない。「割礼を受けた人」とはユダヤ人のことを指し、マルコとユストがそれに該当する。彼らは今、パウロのもとにおり、彼を激励する者となっている。

ローマにいるユダヤ人たちはパウロに冷ややかな歓迎しか与えなかった(使徒 28:17~29)が、パウロとともに獄中にまで行動をともにしてくれた人々の友情、忠誠は彼の心を大いに温め励ました。

私たちも、いざという時に逃げ出す者や信仰を隠す者、隠れる者ではなく、パウロの同労者たちのごとく、積極的に行動する者になりたい。そこには苦しみ、労苦があるかもしれないが、それによって福音が進展しさらに神の国が広がり、救われる人々が増し加えられるならそれは大きな喜びとなる。